



Title	中国東北農村の歌舞芸能「二人転」
Author(s)	金, 士友
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42218
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	金 士 友
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 5 9 1 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 13 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科芸術学専攻
学 位 論 文 名	中国東北農村の歌舞芸能「二人転」
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 山 口 修 (副査) 教 授 根 岸 一 美 教 授 濱 島 敦 俊 教 授 永 田 靖

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国東北地域の民衆的な芸能の一つで「歌、踊り、演技、語り」を組み込んだ「二人転」の構造と社会的文化的背景を関連づけながら記述する音楽民族誌である。いまなお、そして未来へ向けてダイナミックに変貌を遂げつつあるこの芸能は約200年の歴史をもつと推定される。そこで本研究では、その成立と変遷について文献調査とフィールドワークの手法を交えながら、芸能の表演（パフォーマンス）が人びとの生活のなかで果たしてきた役割を論じている。視点としては、一時期芸能集団の内部に所属していたことを活用したインサイダーの目と、日本に留学して学んだ民族音楽学的アウトサイダーの目を交差させたものとなっている。

序章「対象と方法」に続いて、本論はそれぞれ3章から成る2部で構成される。

第1部『二人転』の成立とその展開』では、時間の流れと空間の広がりという脈絡においてこの芸能を概略する。まず、第1章「東北地域の風土」で厳しい農村環境と異なる民族集団の移動、接触、共存について記述したのち、第2章『二人転』の成立過程とそれに関する諸説』でこの芸能の初期史について1800年前後に既存の諸芸能の要素を融合して成立したと仮説を立てる。第3章『二人転』の伝播とその変遷』では、東北地域を遊歴していた芸人たちが多くの異文化の要素を取り込みつつ独自の様式を確立するだけでなく、「戯班」と呼ばれる組織を形成し芸が職業化したこと、さらに、テキストが清代に成立したといわれる物語群を改変したものであることが述べられる。

第2部『二人転』が具有する文化的特質』は、この芸能が他の芸能と影響関係を保ちながら、人びとの文化化(enculturation)すなわち文化成員としての知識獲得に貢献してきたことを論じる。したがって、第4章「地域間・民族間の文化接触」では、多くの芸能ジャンルを個別に記述するだけでなく、それらの相関関係についても考察している。そして、第5章『二人転』の存在の意味』において、語られるテキストがいわば「文化小百科」といえるような性格を帯びることが指摘される。加えて、それが歌い、踊り、演じられることにより、民衆の生活のなかで「戯」という形式が知識や型といった文化価値を担うものとなり、ひいては文化的認同(identity)に貢献する機能をはたすことが述べられる。最後に第6章「むすびにかえて」において、急進的に現代化が展開しつつある状況に鑑みて未来への展望が示される。

(分量 本文87頁 400字換算 約261枚、文献、付録等104頁)

論文審査の結果の要旨

本論文は、巨大な人口を擁する中国のなかでいわば周縁におかれた文化を記述分析する際のモデル研究となっている。すなわち、多種多様にしていまだ十分に知らざる漢民族の地方文化のひとつをとりあげ、隣接する諸文化との関係を重視しつつ過去・現在・未来を論じている点において、すぐれた方法論を提示する結果となっているのである。もちろん、表演芸術を対象としているのであるから、具体的な表演内容を検討する態度が貫かれなければならないはずであり、その点で十分な作業がなされていることは付録として添えられている豊富な採譜例等から明らかである。また、表演そのものだけでなく、表演を直接あるいは間接的にとりまく脈絡と関連づけながら論じているので、バランスがよい。それは、演奏家、作曲家としての資質や体験が、日本留学中に培った研究者としての知見とほどよく融合した結果であるといえよう。

本論文の欠陥をあげるとすれば、論文が豊富な情報の集積となっているにもかかわらず、丹念におこなうべき典拠明記がなされていないし、対象地域の一般史的事実も正確に把握されているとは言い難い。しかし、こうした短所は今後の課題として改められることを期待したい。先行研究のきわめて少ない地域を扱い、また総合芸術という複雑な対象をとりあげて、音楽学的に十分な説得力をもって論じた本論文は、類似研究例の水準をはるかに超えるものである。よって、本研究科は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。